

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	近代日本における美育の成立についての研究：女礼式を手がかりとして
Author(s)	劉, 敏
Citation	広島大学大学院人間社会科学研究科紀要. 総合科学研究, 2 : 45 - 46
Issue Date	2021-12-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052022
Right	掲載された論文, 研究ノート, 要旨などの出版権・著作権は広島大学大学院人間社会科学研究科に帰属する。©2021 Graduate School of Humanities and Social Sciences, Hiroshima University. All rights reserved.
Relation	



近代日本における美育の成立についての研究 —女礼式を手がかりとして—

劉 敏

広島大学大学院総合科学研究科

A Study on The History of Aesthetic Education in Modern Japan - Using the analysis of joreisiki as a clue

Liu Min

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

論文の要旨

芸術による人格的な陶冶を意味する美育は、近代日本では、西洋から伝えられた。本論文は、美育思想が、近代日本で、西洋から、どのように受容されたか、その経緯と変容の内実を解明する。その際、日本に於ける女子教育の伝統にも配慮し、女礼式を焦点に検討を進める。近代の美育思想と制度に於ける女礼式に注目し、その成立の経緯や具体的な内実の分析を通して、日本的な美育の特性を解明する。

本論は五章からなる。各章の概要は以下のよう
に記す。

第一章では、美育という概念を巡って考察した。

美育というものは、美や芸術活動を通して調和的な人間を作ることを企てる教育思想である。この教育思想は古典時代の善美一体から由来する。十八世紀に、ドイツのシラーより先哲の理念を引き継ぎ、理性と感性の調和によって「まったき人間」を形成するという美的教育論をはじめて明確な理論規定として打ち出した。その後、芸術教育

運動を経て、心理学、教育学などの理論も融合し、芸術作品に接することによって、鑑賞能力を陶冶し、美的感受性を涵養することに重点が置かれるようになった。

第二章では、明治期に主流をなした教育学説の系譜をたどりながら、美育思想の受容の主要な流れを整理した。

西洋的な美育思想は、はじめてスペンサーの教育学説を通して、日本に伝えられた。しかし、その時、美育は人間精神に快をもたらしものと認めながら、実生活に無関係で、スペンサーの功利主義教育思想において比較的後ろの位置に置かれていた。また、ペスタロッチ教育思想をベースにしたアメリカのジョホノットの教育論を翻訳した際に、はじめて「美育」という言葉を使って、紹介された。この「開発主義」的な美育は、絵画、音楽など芸術と接することを通して美を鑑識、創造する能力を育成するというものであった。さらに、ヘルバルト主義教育学の展開において、美育は、美による精神的な感化を受け、徳性の涵養を意図する教育として、法令の支持のもとで、図画、

唱歌などを通して実施の段階に入った。最後、社会教育主義思想の影響とパリ万国博覧会の刺激で、美育は産業と結びつける傾向が強まってくる。

第三章では、明治日本において美育思想の変容について考察を行った。

明治維新以後、身分制を解体し、旧来の身分による枠をこえて、通婚の自由が認められた。また、西洋風の生活スタイルの流行により、妻は家の奥にいたのではなく、夫と一緒に社会活動を参加する必要が生じた。こうした状況において、女子の容姿や外見の美しさが重要視されてきた。女性を対象とする美育は容姿美を追求するブームで、美容教育の大義名分として機能した。また、西洋の男女同権や婦人解放運動などが始まったばかりの明治日本においては、女性に割り当てられた任務として家事と育児のほかに、社会の花や緩和剤となることも求められた。それは、当時の男性教育家たちが、女性の性役割が美、または女性が美を司ると認識し、それを通して男性を慰安することを求めたからである。それゆえ、永江正直を代表とする教育家は、そのための「美育」が欠かせないものと唱えた。さらに、心の教育が大きな比重をもつようになった社会環境において、女子の美育も美的な心を育成することを求めた。三輪田真佐子など教育家は女礼などを通して心の美育を提唱した。

第四章では、女子美育に重要な役割を果たした女礼の由来と変遷について考察した。

江戸の中期に小笠原流の武家礼法を学んだ水島卜也は武家の女子を礼法の指導対象として、女礼というものを確立させた。明治時代に、近代的な学校制度は日本において確立した。女礼は小笠原流当主の小笠原清務の建議で、学校教育に採用され、さらに普及された。伝統芸能の再評価などに伴い、茶の湯や生け花など諸芸は女性がなすべきものと位置づけられ、女性の礼法に組み込まれて、女子教養の代名詞となっていった。

第五章では、女礼の検討を通して日本的な美育の独特な側面を考察した。

女礼は美的なパフォーマンスとして、女子の

立ち居振る舞いを規制している。この美的なパフォーマンスを繰り返し稽古しているうちに、伝統的な美的感性を内面化して、最後美の心を育成する。これは日本の身心教育伝統によるものでありながら、日本的な美育の一特性も揭示している。つまり、日本の美育は、身体と精神の両方を重視し、身心の実践を通して、美的思想を内面化し、人格の陶冶や精神の涵養を目指すものである。この点は、日本の美育教育の独自なところと考える。